２　　身代わりになった鹿王　　　　　　　　　　　　文法　用言②　変格活用の動詞

読解　登場人物の主張をつかむ

昔、国王、にして狩りをⓐし給ひけるに、多くの鹿㋐せにけり。二のあり。おのおの五百のの鹿ⓑあり。㋑おほやけに申していはく、「狩りの度に多くの鹿失せぬ。願はくは狩りをとめられて、の鹿を奉らん」と申しければ、鹿王の申す旨にまかせて、「日次の鹿を奉るべし」とて、①狩りをとめられぬ。鹿王ら喜び、日次の鹿を奉るほどに、一つのはらめる鹿あり。②鹿王に訴へていはく、「我の番に当たれり。しかりと言へども、このはらめる子を生みては、今一日の鹿もⓒ出で来べし。今日の番に、他の鹿をさしかへてよ」と言ひければ、まことにさもある事なれば、他の鹿をさしかふるに、も命は惜しき事なれば、「かはるべからず」と言ひければ、はらめる鹿を生ませんがために③鹿王みづから日次にたつ。

* 語注

鹿野苑＝インドにあった庭園。

眷族の鹿＝つき従っている鹿。

日次＝日ごと。

【原文】

昔、国王、鹿野苑にして狩りをし給ひけるに、多くの鹿失せにけり。二の鹿王あり。おのおの五百の眷族の鹿あり。おほやけに申していはく、「狩りの度に多くの鹿失せぬ。願はくは御狩りをとめられて、日次の鹿を奉らん」と申しければ、鹿王の申す旨にまかせて、「日次の鹿を奉るべし」とて、狩りをとめられぬ。鹿王ら喜び、日次の鹿を奉るほどに、一つのはらめる鹿あり。鹿王に訴へていはく、「我今日の番に当たれり。しかりと言へども、このはらめる子を生みては、今一日の鹿も出で来べし。今日の番に、他の鹿をさしかへてよ」と言ひければ、まことにさもある事なれば、他の鹿をさしかふるに、誰も命は惜しき事なれば、「かはるべからず」と言ひければ、はらめる鹿を生ませんがために鹿王みづから日次にたつ。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

昔、〔　　　　〕が狩りをした結果、多くの鹿が死んでしまった。そこで二頭の鹿王が日ごと（＝〔　　　　］）の鹿を献上することを約束し、〔　　　　　　〕をやめてもらった。ある時、身ごもった鹿が、〔　　　　〕は自分の番だが、〔　　　　　　〕に代えてほしいと訴えてきた。しかし、どの鹿も代わってくれなかったので、〔　　　　〕が身代わりになった。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（㋐は終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ〜ⓒの活用の種類と活用形を答えよ。〈２点×３〉

ⓐ〔　　　〕行〔　　　　　　　　〕活用〔　　　　〕形

ⓑ〔　　　〕行〔　　　　　　　　〕活用〔　　　　〕形

ⓒ〔　　　〕行〔　　　　　　　　〕活用〔　　　　〕形

問四　チェック問題［用言②　変格活用の動詞］

各文の（　）内の語を、適当な形に活用させよ。ただし、３はひらがなで答えること。〈１

点×４〉

１　雪の降りたるは言ふべきにも（　あり　）ず…（枕草子）

２　男女（　死ぬ　）者、数十人…　　　　　　　（方丈記）

３　秋（　　）ぬと目にはさやかに見えねども…（古今集）

４　物語など（　す　）て集まりさぶらふに…　　（枕草子）

１〔　　　　　〕　　２〔　　　　　〕

３〔　　　　　〕　　４〔　　　　　〕

問五　傍線部①を現代語訳せよ。〈６点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②とは、どのようなことを訴えているか。次の文の空欄に入る語句を、Ⅰは十五字以内、Ⅱは十字以内で答えよ。〈８点×２〉

今日は　Ⅰ　であるが、子供を生めば、　Ⅱ　ことになるので、他の鹿に差し替えてほし

いということ。

Ⅰ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

Ⅱ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　傍線部③のように、鹿王がみずから進んで献上されたのはなぜか。最も適当なものを選べ。〈10点〉

ア　自分の子を育てるためには、父親の自分より母親が生き残るべきだと考えたから。

イ　子をだしにして自分だけは助かろうとする母親の浅ましさに、嫌気がさしたから。

ウ　まだ生まれぬ我が子を思う母親の愛情を理解し、その気持ちをみ取ったから。

エ　他の鹿を説得できなかったことで、王として生きることに自信がなくなったから。

〔　　　〕

【解答】

問一　国王／日次／御狩り／今日／他の鹿／鹿王

問二　㋐＝死ぬ　㋑＝国王（天皇）〈４点×２〉

問三　ⓐ＝サ行変格活用・連用形　ⓑ＝ラ行変格活用・終止形〈２点×３〉

　　　ⓒ＝カ行変格活用・終止形

問四　１＝あら　２＝死ぬる　３＝き　４＝し〈１点×４〉

問五　狩りをおやめになった。〈６点〉

問六　Ⅰ＝自分が国王に献上される順番（13字）

　　　Ⅱ＝一日分の鹿が増える（９字）〈８点×２〉

問七　ウ〈10点〉

【現代語訳】

昔、国王が、鹿野苑で狩りをなさったときに、多くの鹿が死んでしまった。二頭の鹿の王がいる。それぞれ五百頭のつき従っている鹿がいる。（鹿王らが）国王に申し上げて言うことには、「狩りのたびに多くの鹿が死んでしまった。どうかみ狩りをおやめになって（くだされば）、（こちらから）日ごとの鹿を献上しよう」と申し上げたところ、（国王は）鹿王たちが申し上げることに従って、「日ごとの鹿を献上せよ」と言って、（国王は）狩りをおやめになった。鹿王たちは喜んで、日ごとの鹿を献上するうちに、一頭の身ごもっている鹿がいる。（はらめる鹿が）鹿王に訴えて言うことには、「私は今日の順番に当たっている。そうとは言うが、この身ごもっている子を生めば、また一日分の鹿が生まれることになるはずだ。今日の番に、他の鹿を差し替えてくれ」と言ったので、本当にもっともなことなので、（鹿王は）他の鹿を差し替え（ようとす）るが、誰も命は惜しいものであるので、「代わることはできない」と（他の鹿は）言ったところ、身ごもっている子鹿を生ませるために鹿王が自ら献上の鹿となる。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「鹿王の申す旨」（３行目）とあるが、鹿王の申し出の内容として最も適当なものを選べ。

ア　狩りの度に仲間の鹿が逃げてしまうので、狩りをやめてほしい。

イ　狩りをやめて、残っている鹿の命をみな助けてほしい。

ウ　狩りをする時に、狩る鹿の数をもう少し減らしてほしい。

エ　こちらから鹿を差し出すので、狩りをやめてほしい。

問２　「まことにさもある事なれば」（７行目）とあるが、「さ」の指す内容を、本文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えよ。

【補充問題解答】

問１　エ

問２　このはらめ　～　出で来べし